

第二章 第一節（一）「ただひとりの、生ける、まことの神」

第一章では、聖書について学びました。神は御自身を私たちに知らせるために聖書を与えてくださり、教会はその聖書を信仰と生活の最高の基準として受け取ります。では、その聖書が私たちに示している神とは、どのようなお方なののでしょうか。第二章は、この問いから始まります。第二章は三つの節から成っています。第一節では**神の御性質**が語られます。第二節では**神と被造物との関係**が語られます。そして第三節では**三位一体の神**について語られます。今日は、その第一節を学びます。

一 「ただひとりの、生ける、まことの神」

第一節は、「ただひとりの、生ける、まことの神のみが存在し」という告白から始まります。まず、「ただひとり」です。これは、イスラエルの信仰の根本にある告白です。申命記 6 章 4 節には、「聞け、イスラエルよ。我らの神、主は唯一の主である。」とあります。いわゆるシェマです。また、第一コリント 8 章 4 節では、「唯一の神以外にいかなる神もない」とパウロは語っています。ですから、「神はただひとりである」という告白は、キリスト教が独自に作り出した考えではありません。イスラエルが聖書によって受け継いできた信仰を、教会も告白しているのです。しかし、この「唯一」ということは、単に「神の数は一人です」という数学的な話ではありません。世界を創造し、歴史を支配し、私たちを救われる神が、ただお一人であるということです。だから、私たちの人生も世界の歴史も、最終的には複数の神々の争いの中にあるものではありません。**ただひとりの神の御手の中にあります。**

二 「生ける」神

続いてウ告白は、その唯一の神を、「生ける」神と呼びます。聖書では、「生ける神」という表現が繰り返し使われています。たとえばエレミヤ書 10 章 10 節は、「主は真理の神、命の神、永遠を支配する王」と語ります。また、第一テサロニケ 1 章 9 節では、信徒たちが「偶像から離れて神に立ち帰り、生けるまことの神に仕えるようになった」と語られています。「生ける」というのは、単に「存在している」という意味ではありません。聖書の神は、今も生きて働いておられる神です。世界を創造した後に、どこかへ退いてしまった神ではありません。歴史を人間や自然の力だけに任せておられるのでもありません。神は今も御自身の御心をもって世界に働きかけ、御自身の民を導いておられます。だから「生ける神」という告白には、**私たちが今も神に祈ることができる**という意味も含まれています。神は過去に存在した神ではありません。今ここにおいて**私たちと関わってくださる神**です。

三 「まことの」神

そして、「まことの神」です。ここには、「本物の神」と「人間が作り出した神」との違いがあります。聖書は偶像について、「口があっても話せず、目があっても見えず、耳があっても聞こえない」と語ります（詩編 115 編 4-6 節）。人間が作った神は、人間の手によって存在するものです。しかし聖書の神は、人間によって作られた神ではありません。むしろ、人間を造られた神です。ですから「まことの神」という告白は、**人間の願望や想像によって作られた神ではなく、神御自身が御自身として存在しておられる**ということを意味します。このことは今日でも重要です。偶像というと、木や石で作られた像を思い浮かべるかもしれませんが、人間が自分の願望に合わせて「神とはこういう方であるはずだ」と神を作り変えてしまうなら、そこにも偶像化の危険があります。神を神として受け取ること。それが信仰の出発点です。

四 神は「存在と完全さにおいて無限」である

ウ告白は続いて、「この神は、存在においても完全さにおいても無限であり」と語ります。ここで「無限」という言葉が出てきます。私たちは有限な存在です。私たちには始まりがあり、終わりがあります。知識にも限界があり、力にも限界があります。しかし神には、そのような限界がありません。神の存在そのものが有限なものではないからです。ですから、神を私たちと同じ尺度で測ることはできません。私たちは神について知ることができます。しかし、神を完全に知り尽くすことはできません。ヨブ記 11 章 7 節は、「あなたは神を究めることができるか。全能者の極みまでも見ることができるか」と問いかけます。またヨブ記 26 章 14 節では、「神についてわたしたちの聞きえることはなんと僅かなことか」と語ります。これは、神について何も知ることができないという意味ではありません。むしろ、**神が御自身を知らせてくださるからこそ、私たちは神を知ることができる**。しかし、その知識は神を完全に把握することではありません。神は私たちの理解を超えておられます。

五 神は「最も純粋な霊」である

次に、「最も純粋な霊で、目に見えず、体も部分も情念も持たない」と告白します。まず、**神は霊である**ということです。主イエスもヨハネによる福音書 4 章 24 節で、「神は霊である」と言われました。ここで「霊」というのは、幽霊のようなものという意味ではありません。神は物質的な身体によって存在する方ではない、ということです。私たちは身体を持っています。身体を持っているということは、私たちの存在には場所的な限界があるということです。しかし神は、被造物のように物質的な身体によって制限されません。列王記上 8 章 27 節でソロモンは、「天も、天の天もあなたをお納めすることができません」と祈っています。神は、私たちが作った空間の中に閉じ込められる方ではありません。

六 「体も部分も情念も持たない」

ここは少し注意が必要です。「情念も持たない」という表現だけを読むと、「神には感情がない」という意味に聞こえるかもしれませんが、しかし、それでは聖書が語る神とは違ってしまいます。聖書は、神が愛され、憐れまれ、怒られる方であることを語っています。ですから、ここでいう「情念」は、神が人間のように感情に振り回されるという意味ではありません。人間の感情には、しばしば弱さや不安定さがあります。怒りによって判断を失ったり、恐怖によって行動を変えたりします。しかし神は、そのような意味で感情に支配される方ではありません。**神の愛も、憐れみも、義も、気分によって変化するものではない。**このことを、この表現は示しています。

七 不変、広大、永遠、とらえ尽くすことのできない神

さらにウ告白は、「不変、広大、永遠で、とらえつくすことができず」と続きます。まず、**不変**です。マラキ書 3 章 6 節には、「まことに、主であるわたしは変わることがない」とあります。人間は変わります。考えも変わります。感情も変わります。約束を守ることができなくなる場合もあります。しかし神は変わりません。だから、神の約束に私たちは信頼することができます。次に、**永遠**です。詩編 90 編 2 節は、「山々が生まれる前から／大地が、人の世が、生み出される前から／世々としえに、あなたは神」と歌います。神は、時間の中で生まれた存在ではありません。神は時間に支配される方ではありません。そして、「**とらえつくすことのできない**」とあります。神は私たちの理解を超えています。ですから神学には、いつも謙虚さが必要です。私たちは神について語ります。しかし、**神を語り尽くすことはできません。**

八 全能、知恵、聖、自由、絶対

ここからウ告白は、神の御性質をさらに並べます。「全能で、最も賢く、最も聖であり、最も自由で、最も絶対的である。」ここで一つひとつを独立した性質として考えるよりも、**神の完全さがさまざまな側面から語られている**と考えることが大切です。神は全能です。しかし、その全能は知恵から切り離された力ではありません。神は最も賢い方です。そして最も聖なる方です。また最も自由な方です。神の上に神を制約する別の権威があるわけではありません。だからこそ、神の御業は神御自身の聖なる意志に従って行われます。

九 神は御自身の栄光のためにすべてを動かされる

続いて、「すべてのものを、御自分の不変で最も正しい意志の意向に従って、御自身の栄光のために、動かされる」と告白します。ここには、神の**主権**が語られています。世界は神の

支配の外にあるものではありません。神は御自身の意志に従って、すべてのものを動かされます。詩編 115 編 3 節にも、「わたしたちの神は天にいまし／御旨のままにすべてを行われる」とあります。しかし、ここで「神が何でも好き勝手にする」と理解してはいけません。ウ告白は、わざわざ「**不変で最も正しい意志**」と言っています。神の主権は、気まぐれな権力ではありません。神の聖性と義と知恵に基づいた主権です。そして、その目的は、「**御自身の栄光**」です。世界の中心に神がおられる。だから世界の最終的な目的も、神の栄光にあります。

十 愛と恵みと憐れみの神

しかし、第一節は神の主権だけを語って終わりません。ここから神の愛と憐れみが語られます。「最も愛に満ち、恵みに富み、憐れみ深く、忍耐強く、慈しみとまことにおいて豊かである方です。これは出エジプト記 34 章 6-7 節の神の自己紹介を強く思わせます。「主、主、憐れみ深く恵みに富む神、忍耐強く、慈しみとまことに満ち」ておられる神です。つまり、全能で主権的な神は、同時に、**愛に満ちた神、恵み深い神、憐れみ深い神**なのです。ここを切り離してはいけません。神の力と神の愛は別々ではありません。神の主権と神の憐れみは対立しません。これが聖書の神です。

十一 罪を赦される神、しかし罪を罰される神

さらに第一節は、「不正と過ちと罪を赦される方」と語ります。これは福音の中心にある神の恵みです。しかし、そこで終わりません。神は、「その審判においては最も公正で恐ろしく、すべての罪を憎み、罰すべき者を決して罰せずにはおられない方」でもあります。ここには、一見すると緊張関係があるように見えます。**赦す神と、裁く神**。しかし聖書では、この二つは矛盾しません。神の愛は、罪を「たいしたことではない」としてしまうことではありません。神は罪を本当に憎まれるからこそ、罪を赦すこともまた、軽いことではないのです。そして、この二つがどのように結び合うのかを明らかにするのが、後に学ぶ**キリストの十字架**です。十字架において、神の義と愛が出会います。罪が軽く扱われたものではありません。同時に、罪人が見捨てられたのでもありません。キリストにおいて、神の救いが実現します。

十二 第一節全体をまとめる

ここまで来ると、第一節が単なる「神の属性一覧」ではないことが分かります。第一節は、どのような神を私たちが信じているのかを、一つのまとまりとして告白しているのです。神は、ただひとりの、生ける、まことの神。そして、無限で、霊であり、永遠で、不変で、とらえ尽くすことのできない神。さらに、全能で、知恵深く、聖で、自由で、主権的な神。そ

して同時に、**愛に満ち、恵みに富み、憐れみ深く、忍耐強く、慈しみとまことに富む神**。しかし、その愛は正義を否定するものではなく、**罪を赦されると同時に、罪を正しく裁かれる神**です。このような神を、教会は聖書に基づいて告白してきました。

おわりに

第二章第一節を学ぶとき、私たちは「神についてたくさんの知識を覚えた」と考えるだけでは不十分です。この告白が最後に私たちを導いているところは、**礼拝と信頼**です。神がこのようなお方であるなら、私たちは自分自身を神に合わせようとするのではなく、**神を神として受け入れなければなりません**。神を私たちの尺度に合わせるのではなく、**私たち自身を神の前に置く**。そこから礼拝が始まります。また、私たちには分からないことが多くあります。世界で起こっていることについても、自分の人生についても、なぜこのようなことが起こるのか分からないことがあります。それでも、**神は生ける神であり、永遠の神であり、知恵と力に満ちた神であり、愛と憐れみに満ちた神である**。この告白に立って、私たちは神を信頼することができます。そして第二節では、さらに一歩進みます。**この完全な神は、私たち被造物を必要とされる方ではない**。それにもかかわらず、私たちを造り、私たちに命を与え、私たちを御自身の栄光へと導いてくださる。第二節は、この**神と被造物との関係**を扱います。